

V期 (一般)

受験 番号	<input type="text"/>	氏 名	<input type="text"/>
	<input type="text"/>		

令和4年度

武蔵野大学 専攻科 言語聴覚士養成課程 入学試験問題 (3月6日)

[小論文]

脳科学者の酒井邦嘉氏は、ろう教育への提言として、以下のように述べています。それを読んだ上で、言語聴覚士をめざすあなたの考え・理念について、1000字以内で述べなさい。

＜欧米の聾学校では、1880年の世界ろう教育者会議で口話法の採用が決議されて以来、手話を排除して口話法が導入されるようになり、その後1世紀にわたって、ろう者の教育水準と識字能力の低下を招く結果になった。日本の聾学校の教員がほとんど聴者であるという現状から分かるように、これまでの聴覚障害児教育は、聞こえない子どもたちをいかに聴者の社会に「統合 (インテグレート)」するか、という視点が主流であった。その結果、大半の人が音声言語に基づいて不完全な言語を獲得せざるを得なかったのである。このような過酷なろう教育の現状において、聞こえない子どもたちにとって本当に必要とされる教育とは何か、いったい何が保障されなくてはならないのかを真剣に考え、議論しなくてはならない。(中略)

ろう教育においては、言語能力の確立こそが問題解決の鍵であると筆者は考える。そのためには、言語獲得のメカニズムに即した教育を行わなければならない。初年級では、すべての科目に優先して手話能力の自然な獲得に十分時間を割く必要がある。文字を通した日本語の習得についても、無理に国文法を教えたり訓練するのではなく、文法性が自然に身につくことをねらいとして、適切な例文や文章を繰り返し与えることが望ましい。そして、ろう児が言語コミュニケーションに対して100%に近い確信度を持ちうることを、最大の目標にする必要がある。言っていることによく分からない教師の説明が「言語」というものだ、という曖昧な確信が一度できあがってしまったなら、大人になってから修正することは極めて困難なのである。＞

(『ろう者から見た「多文化共生」—もうひとつの言語的マイノリティ』 佐々木倫子編、ココ出版、2012、pp.94-117より抜粋)